
フェアリーアイズ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーアイズ

【Nコード】

N0263Z

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アイルランドの外交官エリザはロンドンにおいてあるものが見えていた。彼女が見えるのは何故か。アイルランドとイギリスの関係も作品の背景にしています。

第一章

フェアリーアイズ

エリザベラッケンはアイルランド生まれだ。しかし今は。

イギリスの首都ロンドンにいる。何故いるかという仕事だからだ。

ロンドンの二階建てのバスを横目に見ながらだ。背の高いグレーのスーツの黒い目の青年に話す。

「仕事とはいえね」

「嫌なんだね」

「アイルランド人だったら皆そうでしょ」

こう言うのだった。見れば彼女の用紙は周囲の通行人達と少し違っている。

青がかった灰色の目に栗色の波がかった髪、それにやや小柄だ。脚はあまり長くなく胸が目立つ。イギリス人とはあまり思えないものだ。

その彼女がだ。こう言うのである。

「イギリスなんて」

「まあねえ。外交官とはいえね」

彼女は外交官なのだ。それでロンドンのアイルランド大使館に勤務しているのである。

しかしだ。イギリスだからだと彼女は言うのである。

「ジャガイモのことはね」

「それ以外にもね」

「イギリスには色々やられてきたから」

これこそがアイルランドの歴史だ。この国はイギリス、イングランドに八百年の間支配されてきた。そのことを忘れていないのである。

特にだ。そのジャガイモのことだった。

「麦を容赦なく取り立ててそのうえで」
「救済処置は取らなかったしね」
「百万のアイランド人が餓死したわ」
ある国が言う人類史上稀に見る虐政はここにあったのだ。
「そして何百万もね」
「アメリカに行つて」
「誰もが餓えて瘦せ細っていったわ」
「そのイギリスに赴任だね」
「どうせならアジアの何処かに行きたかったわ」
こんなことを言うエリザだった。
「正直なところね」
「アジアになんだ」
「そう、何処かの国にね」
そうだったとだ。こう言つてだった。
具体的な国もだ。ここで挙げたのだった。
「日本とかね」
「日本ねえ」
「そう、日本ね」
その国に行きたかつたというのだ。
「それで美味しい食べ物をね」
「アイランドも人のことは言えないけれど」
それでもだとだ。若者は苦笑いで話した。
「ロンドンの食べ物だねえ」
「話には聞いていたけれど想像以上だったわ」
「まずいね」
「どの料理人も見事なまでにセンスがないわ」
イギリスの料理はアイランド人から見ても最悪だった。
「多分欧州で一番まずいわね」
「ダントツじゃないんだ」
「フィンランドもそうらしいから」

まずいというのだ。その国もだ。

「何でも双壁らしいわ」

「イギリスと同じ位料理のまずい国があるんだ」

「そうらしいわ」

「世の中広いね」

あまりよくない意味でもだ。そうだというのだ。

「いや、そんな国があるんだ」

「そうみたいね」

「遠慮したいね、フィンランド赴任は」

若者の口調は実にしみじみとしたものだった。

「今日にでもジョン・オーウェンにヘルシンキ勤務を命じるとか」

「ヘルシンキね」

「ロンドンの次はヘルシンキはもう罰ゲームね」

「全くだよ。けれど本当にロンドンは」

「ええ、イギリス自体は」

どうかとだ。エリザはジョンに話していく。

「最悪ね」

「本当にイギリスが嫌いなんだね」

「それは貴方もでしょ」

「イギリスを好きなアイルランド人はいないさ」

ジョンもこのことははっきりと言う。

「何もかもがね」

「そうよ。全くこの国は」

どうかというのである。うんざりとした顔で。

「いいものは一つもないわね」

「何もかもが気取っていて」

「それか妙に下品で」

貴族と下町、その二つを対比させての言葉だった。

第二章

「そういうのしかないから」

「我が国は大衆の賑やかさなのに対してね」

「高慢な貴族と下品な労働者」

エリザの認識はかなり拡大されて彼女の中にあつた。

「それが凝縮されたのがこの街ね」

「ロンドンだね」

「そうよ。今日にでも転勤願いを出すわ」

「それで日本にだね」

「ええ、行くわ」

そんな話をしながらだ。二人はその大嫌いなロンドンの街を歩いていた。そのエリザのところだ。

急にだ。車が飛び込んで来た。

ジョンは咄嗟にエリザを庇って跳んだ。見事な運動神経だった。

しかし石畳の上に倒れ込む時にだ。彼はしくじってしまった。

エリザは頭を打ってしまった。それによつてだ。

彼女は気を失ってしまいだ。それでだった。

すぐに病院に担ぎ込まれた。そのうえで治療と検査を受けた。その結果。

命に別状はなかった。幸いにして後遺症もないという。そのことを聞いてジョンはまずは安堵した。しかしその彼女の見舞いに来てだ。

ジョンはだ。ベッドから身体を起こしているエリザの顔を見てだ。驚きの顔で言うのだった。

「あの、それって」

「目ね」

「一体どうしたんだい、急に」

「ドクターの話だね」

彼女が今入院しているこの病院の医師のことだ。

「あの時頭を打って」

「ああ、あの時」

「その影響らしいわ」

「それでだというのだ。」

「目の色がこうなったのは」

「その左目ね」

「ええ、この目ね」

エリザはここで自分のその左目を擦った。その目の色は。

紫だった。アメジストの輝きのその神秘的な目を擦りながらだ。

こう言うのだった。

「珍しい色よね」

「紫の目はね」

「ケルト人の目だけねど」

それでもだった。紫となるとだ。

「私達の間でも滅多にいないから」

「僕も見たことは殆んどなかったよ」

「しかもよ」

さらにあった。エリザの右目はだ。

そのままの色だったのだ。青がかった灰色のままだ。

その二色の目になっていた。それでこう言うのだった。

「フェアリーアイズなんて」

「うん、それだね」

「何ていうのかしら。想像していなかったわ」

事故からそうなることをだ。どうしてもだというのだ。

「本当にね。ただ」

「ただ？」

「左目は見えてるわ」

ちやんとだ。目の働きをしているというのだ。

「これまで通りね。ただ色が変わっただけみたい」

「じゃあそれだけで」

「特に変わらないわ。まあ目はそれでいいとして」

「退院は何時かな」

「三日後よ」

もうその時にだというのだ。

「怪我は軽かったというか打っただけで」

「後遺症もなくて」

「だからね」

それでだ。すぐに退院できるといふのだ。

「正直運がよかったわ」

「神様の御加護だね」

「ロンドンでも神様はいるのね」

冗談めいて笑いながら。エリザはこんなことも言った。

「ちゃんとね」

「神様は働きの者だね」

「ええ、有り難いことにね」

笑ってだ。エリザはまた言った。何はともあれだ。

彼女は無事だった。ただ左目の色がそれになっただけだ。

そのまま退院して暫くは何もなかった。しかしである。

ある日勤務中に不意にだった。それが見えたのだ。

「あらっ!?!」

「何かあったのかい?」

「今ね」

ふとだ。視界の端にだった。

それが見えたのだ。小さい赤いキャップを被った老人だ。左足は

木の義足、白鯨の船長の足になっている。

第三章

その小人を見てだ。思わず声をあげてジョンに突っ込まれたのだ。
「ちよつと。見間違いかしら」

「僕をステイーブ・マツクインと見間違えたのかい？」

「ええ、デビット・ベツカムとね」

「おいおい、イギリスなのかい」

「じゃあ何がいいのかしら」

「だからマツクインだよ」

そのアイルランド系アメリカ人の俳優をだとだ。あくまで言うジョンだった。

「それで頼むよ」

「また言ってくれるわね」

「言うだけは言うさ。とにかくね」

何を見たのかとだ。また問うジョンだった。

「それだけけれど」

「気のせいね」

結局はこう考えるエリザだった。

「やっぱり」

「気のせいって」

「何でもないわ」

また言う彼女だった。

「じゃあ。今はね」

「今は？」

「仕事しましょう」

コーヒーを飲んでからだ。こう言う彼女だった。

それでだ。この日はそれで済ませた。しかしである。

翌日はだ。大使館に行く途中にだった。

道の左側の壁にだ。猫がいた。白いマンチカンである。しかしそ

の猫はだ。

長靴を履いてそのうえで壁の上を二本足で歩いている。明らかに普通の猫ではない。

しかもだ。その猫がだ。

右の前足を手の如くあげてエリザに挨拶してきてだ。「こう言つのである。」

「よお、おはよう」

「えっ、猫がって」

「驚いたっていかおいらの姿見えてるんだね」

「見えてるも何も」

どうかとだ。エリザは引きながらその長靴を履いた猫に言い返す。

「猫が喋って二本足で立って」

「ははは、おいら普通の人間にはただの猫って思われてるんだ」

「ただの猫？」

「おいら妖精なんだよ」

それだと話す猫だった。

「ケット＝シーっていうんだ。知ってるよな」

「ケット＝シー。あああれね」

ここでだ。エリザもわかったのだった。

「そういえば貴方それね。童話とかに出て来る」

「あんたアイリッシュだね」

ケット＝シーはそのことも見抜いて言う。

「大体わかるよ」

「わかるの」

「感じてわかるよ。それでね」

「それで？」

「まああんたがおいら達が見えるのなら」

「それでだというのだ。ケット＝シーは。」

「おいら達の友達だな」

「姿が見えるだけで？」

「姿が見えて話ができるだろ」
妖怪は明るく笑って彼女に話していく。
「ちゃんと」
「今こうしてね」
「だからだよ。友達だよ」
「それでだ。彼等はだというのだ。」
「だから宜しくな」
「妖精のお友達ね」
「変わってていいだろ」
今度はこう言って笑う妖精だった。
「じゃあそれじゃあな」
「これからね」
「宜しくな。ああ、そうだ」
「ここでだ。ケットシーはさらにだった。」
笑いつつ二本足で立ちながらだ。こう言ったのだった。
「おいら達の姿は普通の人には只の猫に見えるからな」
「普通の猫になのね」
「ああ、四本足の猫にな」
「見えるというのだ。まさに普通の猫にだ。」

第四章

「だからあんた今周りから変な奴に思われてるからな」

「猫と話をしている変な人ね」

「そうだ。そこんところは納得してくれよ」

「納得するも何も」

エリザは腕を組みそのうえでケットゥシーを見ながら話す。

「妖精と話してできること自体がおかしいから」

「とにかく。あんたはおいら達が見えて話ができる」

そのこと自体がどうかというエリザだった。

「そのことで何かあるかもな」

「そうなのね」

そんな話をしてだった。

エリザは妖精を見て話ができるようになった。その結果だ。

普通ではわからない様々なことがわかったのだった。

「へえ、そうなの」

「ああ、この街って結構な」

「狐とかが多いんだよ」

こうだ。妖精達が自分の部屋でビールを飲みながらくつろいでいるエリザに話した。彼女はシャワーを浴びた後でジーンズとティーシャツになりベッドの上に座ってだ。そのうえで缶ビールを飲んでるのだ。

その彼等の周りに犬や猫や小人の要請、あのマンチカンのケットゥシーもいてだ。それぞれが彼女に話しているのである。

そのマンチカンのケットゥシーがだ。彼女に話す。

「動物がな」

「犬や猫だけじゃなくて」

「ああ。ペットだけじゃなくてな」

そうしただ。所謂野生のものもだというのである。

「多いんだよ」

「そういえば歩いていると」

そのロンドンを歩いているとだ。エリザも見たのである。

「結構多いわね」

「面白い町だろ」

「好きにはなれないわ」

このことはだ。どうしてもだった。

「だって私アイルランド人だから」

「イギリスが好きなアイルランド人はいないか」

「絶対にね」

「おいら達は普通にやってるんだがな」

ケット「シーはだ。エリザのイングランド、つまりイギリス嫌いを聞いてこう言った。

そしてだ。さらにだった。仲間達に話すのだった。

「なあ、そうだよな」

「そうそう。妖精に国境はないからね」

「イングランドでもアイルランドでも」

「スコットランドでもね」

「ウェールズでも」

イギリスを構成する四国全てがだった。妖精達にとっては同じなのだ。

それでだ。また話す彼等だった。

「同じだからね」

「人間だけが違うからね」

「その辺りは」

「その人間がだよ」

ここでだ。不意にだった。

妖精達はだ。こんなことを言ってきたのだった。

「また変なことするしね」

「そうそう、またね」

「おかしなことをするね」

「おかしなことって？」

それを聞いてだ。エリザもだ。

ビールを飲むその手を止めてだ。そのうえでだった。妖精達にだ。そのおかしなことについて尋ねた。

「何、それ」

「ああ、爆弾を爆発させるんだよ」

「この町では多いよな」

「全くな。何かあつたらすぐだからな」

「起こるからな」

こうだ。彼等は難しい顔で話す。それを聞いてだ。

エリザは難しい顔でだ。こう言うのだった。

「あの、それってまさか」

「あれっ、心当たりあるのかよ」

「あるも何もよ」

顔を青くさせてだ。ケットシーにも話す。

「それってIRAじゃないの!？」

「IRA!？何だよそれって」

「だから。アイルランド共和軍よ」

それだとだ。エリザは叫ぶ様にして彼だけではなく妖精達全員に話す。

「それよ、活動を停止して平和路線になったんじゃ。いえ」

「いえ、その次は？」

「それに反対する強硬派か」

こうした流れは容易に想像がついた。政治活動、テロリズムであつても常だからだ。

第五章

「それなのね」

「まあとにかく心当たりあるんだな」

「アイルランド人ならね」

当然のことだとだ。エリザはケットシーに返す。

「それも当然よ」

「そうなのか」

「そうよ。それでよ」

妖精達にだ。さらに問うのだった。

「それは何時何処でやるのよ」

「ああ、それな」

「実はな」

「ここだ。小さな羽根の生えた妖精達が言う。所謂フェアリー達である。」

「ベーカー街の白いカーテンに青い扉のビルだな」

「その一階か？」

「二階だったぜ」

「そう、ホームズのいる場所の二階ね」

ベーカー街といえばホームズだ。エリザもそれで頭の中に入れていた。何はともあれこれで場所はわかった。

それだった。エリザは妖精達にさらに尋ねた。

「じゃあそこに潜り込んで色々聞いてくれる？」

「で、そこで聞いたことをどうするんだい？」

「それで」

「決まってるじゃない。それをスコットランドヤードに連絡して」

推理小説の常連の組織が出て来た。そのシャーロックホームズと並ぶ推理小説の花形だ。その彼等に連絡をしてだというのだ。

「事件を未然に防ぐのよ」

「イギリスが嫌いじゃないのか？」

「それとテロは別よ」

そのことはちゃんとわきまえているエリザだった。それでだった。すぐにだ。妖精達にそこに向かってもらってだ。行動計画やテロリスト達の個人情報まで全て仕入れてもらいそれをだ。スコットランドヤードに通報したのである。

そのテロリスト達の中にスコットランドヤードが最初からマークしている人物がいてだ。話はスムーズに進んだ。それによってである。

事件は解決された。無事だ。

だがエリザは情報を提供しただけで全ては非公式ということになった。それでだった。

妖精達にだ。こう言ったのだった。

「貴方達のお陰よ」

「それで爆弾が爆発することはなくなった」

「だからいいんだね」

「そうなんだね」

「そうよ。本当に何よりよ」

こうだ。エリザは笑って彼等に話す。

「貴方達のね」

「そうなんだ。自分の手柄じゃない」

「そうなんだね」

「そうよ。私は貴方達から話を聞いただけだから」

だからだ。エリザは言うのである。

「それだけだからよ」

「無欲だね。何か」

「だよ。ここで自分の手柄にして大威張りする人間もいるのに」

「そういうこと全然しないなんて」

「いいことだよ」

「まあ。昔から欲はないから」

エリザはそうした人間だった。無欲で実際のところビールが飲めれば幸せな。素朴で無欲なところのある女性なのである。

だからだ。今妖精達にもこう言うのだった。

「だからね」

「ふうん、そうなんだ」

「それはいいことだけれどね」

「下手に欲の皮が突っ張ってるよりもいいよ」

「美德っていうのかな」

「美德ね。その言葉だけ受け取っておくわ」

エリザはその言葉に対してだけ欲を見せた。

「有り難うね」

「それとだね」

「ここだ。ケット＝シーがだった。」

後ろ足で立ち上がりながらだ。エリザを見美の前足で指し示しつつ言ってきた。

「あんたこれからいいことあるよ」

「いいことって？」

「そう。いいことをしてしかもそのことに威張らない人間にはね」
何があるか。ケット＝シーが話すのはこのことだった。

第六章

「神様がご褒美をくれるから」

「そうなの」

「そう。まあその幸せを待ってね」

「今はそうしていればいいのね」

「そう。ゆっくりとな」

そうしてだとだ。エリザに告げたのだった。そしてこうした話を妖精達にしてからだ。一月程してからだった。

エリザにだ。同僚のジョンがだった。

花束、アイルランドの国花のそれを出してきてだ。こう彼女に言うのだった。

「よかつたらさ」

「これからね」

「うん、ずっと一緒にいたいけれど」

こうだ顔を赤らめさせて彼女に言ってきたのだ。

「駄目かな、それは」

「有り難う」

エリザはまずはだ。微笑んでこう彼に答えた。

そしてだ。そのうえでジョンにあらためて告げた。

「じゃあこれからもね」

「一緒にいてくれるね」

「アイルランド人はカトリックよ」

このことはまずは絶対だった。アイルランドとイングランドの対立は宗教的な理由もあったのだ。カトリックとイギリス国教会である。

それでだ。彼女はここでこう言ったのである。

「だから一度結ばれたらね」

「だからだよ」

彼もここで笑って言う。

「僕もカトリックだから」

「知ってるわ。そのことは」

「一緒にね」

「そうしましょう」

こうした話をしてだった。エリザはジョンの告白を受け入れてだ。アイルランドの国花を受け取ったのだった。

そのことを部屋で妖精達に話す。やはりビールを飲みながら。

「本当に幸せが来るなんてね」

「驚いてるんだ」

「そのことに」

「そうよ。まさかと思ったわ」

「こう言う彼女だった。」

「いや、それでもね」

「嬉しいだな」

「そうなんだね」

「ええ、とてもね」

嬉しくない筈がなかった。実際にだ。

「嬉しくない筈がないし」

「ほらな、言った通りだろ」

ここでまたケット「シーがエリザに話す。

「いいことがあっただろ」

「ええ、とてもね」

「おいら達はこうしたことがわかるんだよ」

「人ではわからないことがなのね」

「そう、わかるんだよ」

「こう話すのである。」

「おいら達にはな」

「そして私はその貴方達が見える」

青がかった灰色と紫の二色の目を頬笑まさせてだ。

そうしてだ。笑顔でこう言った。

「これも神のお導きかしら」

「人間の神様はおいら達の神様じゃないけれどな」

この辺りは色々複雑だった。妖精達はケルとの神々の成れの果てという説があるのだ。

それでそこは違うと言っただけだった。ケット・シーはエリザにあらためて話す。

「まあそれでもあんたがおいら達を見られるようになったのはな」

「あの事件を未然に防いで」

「そしてあんたが幸せになる為なんだろうな」

「そうなのね。それじゃあ」

エリザはケット・シーのその言葉を聞いてだった。

にこやかな笑みになって。そうしてだった。

ビールを持っていない左手でまずは青がかった灰色の右目、そして次には紫の左目を擦ってだ。それからこう言ったのだった。

「この目に。神に感謝させてもらうわ」

「そのうえでこれからもな」

「宜しくね」

「ええ、お互いにね」

こう言い合ってしまった。エリザと妖精達は。

それぞれの酒を飲みながらだ。乾杯をしてこれからも楽しく付き合うことを約束するのだった。

フェアリーアイズ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0263z/>

フェアリーアイズ

2011年12月1日00時50分発行